

「悔しい」は「嬉しい」のもと

広島県立広島中央特別支援学校

中等部第3学年 榎沢 桜香

(※原文点字のため墨字訳)

「悔しい」は「嬉しい」のもと

広島中央特別支援学校 中学部三年 榊沢 桜香

あなたは心の底から「悔しい」思いをしたことがあるだろうか。

私は去年、これまで感じたことがないくらい悔しい思いを経験した。

去年は、二年に一度行われる全国盲学校珠算競技大会がある年だった。

この大会は加減算、暗算、掛け算、割り算の四種目を行い、全国の選手と得点を競うものだ。私は小学部六年生の時もこの大会に出場し、全国一位を受賞している。そのため、中学部で臨む今大会でも全国一位を目指して、練習に取り組むことになった。

私が最初に悔しい思いをしたのは、二学期に行われる大会に向けて、校内の選手が集まる強化練習初日である。選手は、まず一斉に、算盤で一から百までの数を足していく練習をした。自分でも得意と言える算盤、普段の私ならば、一分以内に軽々できるはずだ。しかし、計算の途中で算盤の珠を入れ間違えてしまい、九十五まで足したところで時間切れになってしまった。先生から、「今の時間は一分十五秒でした。この時間までに最後までできなかった人は算盤の練習が足りません。もっと練習をしなさい。」と言われた。私はその時、小学部の年下に負けたことと、先生から言われた言葉に対して、悲しい、恥ずかしい、いやこれまで感じたことがないくらい悔しい思いがした。この会場から逃げ出し、一人になりたいと思うほどだ。しかも、その強化練習は一学期最後にあったため、私はこの悔しい思いを抱えたまま、夏休みを過ごすことになってしまったのだ。

私は、夏休み中も加減算や暗算の練習の前に毎回必ずこの練習を行うことにした。「何としても二学期最初の練習で、恥ずかしい思いをしたくない、一分以内に足せるようになってやる。」という強い気持ちと、やらなければいけないという使命感すら感じた。

夏休みが終わり、いよいよ勝負の強化練習の日が訪れた。この時の私は、指から重りが外れたように、珠を早く動かせるようになっていた。そして、誰よりも早く「できました」と言う私の声と同時に、「四十五秒！」と、先生から伝えられたタイムが会場に響き渡ったのである。私はその時、「いつの間にこんなに早くなったのだろう。たくさん練習したかいがあった。」と喜びを隠せなかった。さらに、みんなの前で、先生から練習の成果をほめられ、抱えていた悔しさが消え去り、達成感ととても嬉しい気持ちでいっぱいだった。それから本番まで、練習に練習を重ねていった。

しかしながら、その後、私はまたしても悔しい出来事にぶつかったのである。それは、珠算競技大会本番のことだ。緊張のあまり、手がかじかみ、珠を入れ間違えてしまった。その後は指も慣れてきて、なんとか全種目最後までやり切ることができた。

十一月に結果が発表されるまで、「一位じゃなかったらどうしよう。家族になんて言えばいいんだろう。いやまだわからない。大丈夫かもしれない。」と悶々とした日々を過ごした。

いよいよ結果発表の日がきた。私の淡い期待は打ち砕かれた。結果は「二位」だった。校長先生から順位発表された瞬間、私は声が出ず固まってしまった。それどころか、耳をふさいで、またしてもこの場から早く逃げて一人になりたいという気持ちがした。そして、この感情は悔しいという感情では表せられない、そう、これこそが「最悪」という感情なのだと感じた。周りから「全国で二位はすごいよ」とほめられたが、私は嬉しい気持ちになれず、むしろ「話しかけられたくない」という気持ちになった。

「このまま悔しい気持ちのまま珠算を終わりにたくない。」という思いが強くなっていったある日、私の思いが届いたように、先生から、一月に開催される視覚障害者珠算検定試験の案内がきた。さらに先生から、どのクラスを受けるか選択を迫られた。私は迷ったが、「一番難しいAクラスで合格して、嬉しい気持ちで珠算を終わりたい。」と思い、Aクラスの受検を決意

した。あの「悔しい」を通り越して「最悪」と感じた思いを、むしろ「武器」にしてやろうという気持ちで。

検定試験に向けた練習は困難の連続だった。加減算のスピードが早く、ついていけなくなったり、問題が制限時間内にできなかったりすることもあった。それでも私は練習をやめることなく続けた。冬休み中も、練習問題を繰り返しこなし、「絶対合格してやるんだ」という思いで練習を続けた。そして、いよいよ本番がきた。緊張と不安はあったが、それよりも練習の成果を出し切ろうという思いで試験に臨んだ。手ごたえはあった。

二月中旬に入り、ついに結果発表の時がきた。私は「これで合格できなかったらこの悔しい思いはどうしたらいいんだろう。不合格だったら逃げるしかない。」と不安でいっぱいだった。そんな私の前で、各種目の得点を読み上げる先生の声。私はその得点を瞬時に暗算し、合格したと分かった瞬間、私は嬉しさのあまり椅子から飛び上がり、これまでの悔しさを吹き飛ばすほどの大きな声を出してしまった。私の喜びは廊下中に響き渡ったのである。そして、この嬉しい気持ちを一刻も早く誰かに伝えたいという気持ちにもなった。私は「悔しいことをたくさん経験し、乗り越えるために努力したから合格できたのだ」と思った。そして、「悔しいことがたくさんあっても、練習をやめなければ、必ず嬉しいことがある」ということを学んだ。つまり「悔しい」は「嬉しい」のもとなのだ。

私は今、この経験を武器に、十一月に行われる全国盲学校点字競技大会で良い結果を出せるように練習を頑張っている。これからも「悔しい」ことにたくさん出会うだろう。でも、あきらめずに努力を続けることで「嬉しい」ことがたくさん待っていると信じている。

＜指導者の言葉＞

この作品は、特別活動の単元「校内弁論大会予選に向けて」において、「原稿作成を通して自分を見つめ直すとともに、自他の良さに気付くことができる」ことを目標に作成しました。本生徒は、文を書くことには強い苦手意識をもっています。しかし、昨年度、自身が得意としている珠算競技大会での練習時や大会本番での失敗により、言葉にならないほどの絶望と悔しさを感じたことから、必死に気持ちを切り替えて、珠算検定合格へつなげることができた経験を通して、この思いを弁論大会で聞き手にぶつけたい、伝えたいと強く願うようになり、作成に意欲的に取り組むことができました。

中学部弁論大会での意見交流を経て、校内弁論大会で発表するために、また、作品コンクールに応募するために、国語科の単元「説得力のある構成を考えよう」の中で、さらに推敲を重ねました。推敲当初は、思いが強いだけに、場面の状況や心の動きが聞き手や読み手にうまく伝わらない表現が目立っていました。そこで、自分の思いばかりを綴るのではなく、

①聞き手に何を伝えたいのかを明確にする。

②聞き手を意識して、導入や全体構成、表現を工夫する。

ことを指導しました。生徒は、アドバイスをもとに、発表の場面ごとに、どのように説明すれば、聞き手や読み手に納得してもらえるか、自身の思いを効果的に伝えることができるかを考え、文章を整理していくことができました。

自分の心の動きや葛藤を率直に表現し、くよくよと悩んだり、失敗を恐れて逃げ出したりせず、どうしたら失敗を挽回できるのかを考え、機会をとらえて全力で臨む様子が生き生きと描かれた作品です。今後も「『悔しい』は『嬉しい』のもと」という学びを生かして、自分の力で未来を切り開いていってほしいと願っています。